

「マジック」の真実①

小松啓一郎

「マジック」とは、太平洋戦争開戦前から日本の極秘外交暗号電文(パープル)を密かに傍受・解読していた米国防務省の情報部が名付けた暗号名である。実はこのマジックが、昭和十六年(一九四一年)十二月八日の日本海軍による真珠湾攻撃で始まる太平洋戦争の直接的原因として、「重大な過ち」を演じていたのである。

そして、さらに問題なのは、日本でも欧米でも、多くの歴史家がこの事実の重みを見落としていたことである。

一九九〇年代、英国の大学院に留学中だった私が取り組んだ博士論文の研究テーマは「国際関係の不安定化をもたらす無意識レベルでの相互パーセプション(認識)ギャップや、誤解という問題を引き起こすマイナス作用」についてであった。

その具体的な分析事例として選んだのが、真珠湾攻撃に先立つ日米交渉が何故、最終的に破綻したか、という問題であった。

考えてみれば、皮肉なことではあるが、右派であれ、左派であれ、あの戦争が「歴史的必然」で

あり、通らなければならない「必要悪」だったと見る点では歴史観が奇妙に一致している。

しかし、日米双方の政治家や軍人、国家意思決定関係者が残した開戦前の一次資料(原記録)などを別の観点から注意深く付き合わせてみれば、あれが決して歴史的必然性のある戦いではなく、回避可能な悲劇だったという事実が見えてくる。

実際、日本では陸軍を中心にソ連警戒感が歴史的に非常に強く、既に泥沼化していた日中戦線に大兵力を投入していること自

体、ソ連軍の対日攻勢に利用されてしまつたのではないかと、この懸念が常にあった。

陸軍は対米戦争どころではなかったのである。日中戦争本格化の引き金となった一九三七年七月の蘆溝橋事件の発生原因についても、今に至るまで専門家の間では不明だとされている。

他方、米国側でも対独警戒感が非常に強く、本音のところでは太平洋方面で対日戦争を考へるところではなかった。つまり、日米開戦回避のために始められた和平交渉については、交渉当事国の双方に十分なニーズがあったということになる。

それが何故、あのような交渉失敗につながってしまったのか。その真相を知るには、やはり、米国の陸海軍情報部が「マジック」の英訳段階で、猛烈に誤訳、曲訳を

繰り返していた事実の重大性を指摘しておかなければならない。

外交暗号解読の成功という米国の仕事自体は実に見事であった。しかし、いくら解読に成功しても、それは暗号化された「日本語電文」を平易な日本語文(平文)に戻すことに成功しただけであって、大統領や国務長官ら最高意思決定者の判断に役立てるには、その平文をさらに英訳しなければならなかった。だが、米国はその英訳作業の段階で「致命的なミス」を繰り返してしまったのである。

当時の日米間で認識されていた三つの主要な争点とは、(一)中国市場の門戸開放、(二)日独伊三国同盟の扱い、(三)中国駐留日本軍の撤退問題であったが、それら全ての争点で日本政府の意思が誤訳、曲解され、米国の国家意思決定グループに対して誤った内容が伝えられていた。実は、ほとんどが正反対に伝えられていたのである。

一例を挙げれば、日本語の「最

後」という言葉が、すべて「ザ・ラスト」(the last)と訳された。しかし、例えば、再会した友人同士の間で、「あなたと最後にお会いしたのはいつでしたか」と言うように、「最後」には本来、「一番最近」「最新」「ザ・レイテスト」(the latest)という意味もある。

実際、日本側は一九四一年十一月の交渉段階で、米国防府に対して、「甲案」「乙案」という複数の提案を用意し、まず甲案を提示してみても妥結困難であれば乙案を提示するという方針をとっていた。

しかし、乙案提示前の甲案提示段階から、「マジック」はその甲案を常に「ザ・ラスト(最後)の提

誤訳が生んだ日米開戦

案」と繰り返し誤訳していた。

つまり、「甲案で妥結できないれば、もはや戦争しかない」というのが日本側の立場だと誤解され、「日本は好戦的」「信用できず」ということになってしまった。

そんなことは知らない野村吉三郎駐米大使らが、「平和努力」を強調すれば、暗号解読で日本の「本音」を知っているつもりで米側は、「甲案妥結失敗」「即対米開戦」という東京からの指示を大使らが隠して嘘をついている、と判断し、彼らの人格まで信用しなくなつた。

これが米国側の言う「日本の二枚舌外交」であり、戦後発表された米国の多くの研究でも、「二枚舌外交」論は当然のこととして受け入れられてきたのである。

(『「マジック」の真実①』は16日に掲載)

地球環境平和財団欧州代表。昭和29年生まれ。政府系金融機関勤務後、英国・オックスフォード大留学。同大大学院で博士号(国際関係論)。世界銀行勤務。英国・通商産業省上級貿易アドバイザーなどを経て、英国王立国際問題研究所会員。

文化